STREAM
交通安全教育の潮流

全国に拡がるHondaの高校生交通安全教育活動　連載：第8回

各校の先生方が主体となって、交通安全教育を継続していく

このコーナーでは、ホンダが全国で展開している高校生交通安全教育を取り上げている。今回は、群馬県と兵庫県の事例を紹介する。

実技によって生徒の安全意識の向上を図る

群馬県立高崎商業高等学校では、昨年10月に2年生と3年生を対象に自転車教育が実施された。

同校生徒指導主事の富岡潤一教諭は「本校では、全校生徒の9割以上が通学に自転車を利用しています。そのため、生徒への交通安全指導はたいへん重要だととらえています。ホンダの高校生交通安全教育は生徒に交通ルールを伝えるだけでなく、実技によって生徒の安全意識の向上が図れることから、継続して実施することにしました」と話す。「昨年度、初めて実施したところ、体験を通じて事故防止に必要な意識を身につけられるので、生徒にとって有意義だったと思います。私たち教職員も積極的に指導に協力するなど、前向きに取り組んでいます」。

群馬県立高崎商業高等学校の先生方による交通安全教育

周囲を気遣うことの大切さに気づいてもらう

10月29日は3年生約320名が参加。実技の「8の字走行」と「一列走行」は同校の先生方が担当した。

「8の字走行」は直径10mの円をつなげた8の字コース内を自転車20台で走行する。先生方はコースの脇に立って、生徒がコースの外を大回りしたり、途中で足をついていないかチェックする。1台ずつコースに入っていくが、20台が入る前に誰かがコースの途中で止まってしまう。先生は生徒を集め、全員がスムーズに走るためにはどのようにすべきか質問すると、「ゆっくり走る」「他の人の動きをよく観る」「譲り合う」と生徒たちが答える。これらを一人ひとりが実践することで、最終的にコース内を20台で走行することができた。

最後に、実技の指導を担当した先生が「皆さんは『事故には遭わない、自分は大丈夫だろう』と思っているかもしれません。でも、いつ事故に遭うかわからない。だから、こうした教育が必要なのです。どうすれば20台で8の字走行ができるかを考えることは、どうすれば事故に遭わないかを考えることにつながります。ゆっくり走る、周囲をよく観る、相手を思いやり譲り合う、これを常に意識して自転車に乗ってほしいと思います。そして、今日身につけたことは、皆さんが卒業してクルマの運転をする時にも役立つはずです」と締めくくった。

直径10mの円をつなげたコース内を自転車20台で走行する「8の字走行」。20台がスムーズに走るためには、譲り合いの気持ちが大切であることに気づいてもらう

初回から先生方が中心となって指導

兵庫県立北条高等学校は昨年4月に全校生徒約460名を対象に自転車教育を実施。同校も生徒の9割が自転車で通学している。同校生徒指導部長の神田吉輝教諭は「生徒への交通安全指導は行っていたものの講話など座学が中心でした。ただ、それだけでは不十分で、実技を通じて学べる機会も用意したいと考えていたのです。兵庫県の生徒指導部長会でホンダの交通安全教育を取り入れた学校の話を聞き、どのような内容か興味を持ちました」と振り返る。

兵庫県立北条高等学校の先生方による交通安全教育

そして、本田技研工業（株）安全運転普及本部鈴鹿普及ブロックから教育プログラムについて説明を受け、神田教諭は自分たちもできると感じ、先生方12名が主となり、指導を実施した。指導にあたっては、生徒指導部の中村祐太教諭、山本未来（みきお）大教諭が中心となり、事前に研修会を開催した。

「本校では行事等を開催する際、担当部署以外の教職員でも、お願いすれば積極的に協力してくれます」と中村教諭は話す。こうした相互の協力関係が交通安全教育にも活かされたといえるだろう。「研修会では鈴鹿普及ブロックから提供していただいた指導書と映像資料（DVD）が参考になりました。生徒の気づきを促すために、私たちがどのように動けばいいか、全員で理解でき、参加する教職員の意識も高まったと思います」。

兵庫県立北条高等学校生徒指導部（写真左から）神田吉輝教諭、山本未来大教諭、中村祐太教諭

体験を通じた、気づきを促す教育を今後も継続

実技は「8の字走行」と「飛び出し体験」。校庭でのコースの設営も先生方の手で行われた。山本教諭は「飛び出し体験では見通しの悪い場所から私たちがわざと飛び出すなどして、生徒に模擬的なヒヤリハット体験をしてもらえたのが効果的でした。走行中に両手でブレーキをかけても、すぐに止まれないこと、携帯や傘を持つなど片手運転はさらに危険であることを、生徒に理解させることができたと思います」と感想を語った。

「クルマと生徒の自転車が軽く接触したり、生徒だけの単独事故は少なからず起きています。今のところは軽微な事故で済んでいますが、何もしなければ、いつか重大な事故が起きてしまうと思います。そのため、交通安全教育は継続していく必要があります。その中で、体験を通じて、自分で気づくということは大切なことです。こうした手法によるホンダの高校生交通安全教育を本校に根づかせていきたい」と、神田教諭は今後を見据える。同校では今年4月、新1年生を対象に先生方だけで実技教育を行う予定だ。

平成27年4月から、ホンダの高校生交通安全教育の全国展開は3年目に入る。学校内で継続させていくためには今回、紹介した2つの高校のように各校の先生方が主体となって進めることが求められる。ホンダは、学校内で交通安全教育が定着させるための支援を行っていく考えだ。

「飛び出し体験」では生徒が携帯電話を見ながら走行。携帯電話を注視していると、クルマのカゲから先生が投げ込む物や、先生の飛び出しに気づくのが遅れることを体験してもらう